校友時報

平成4年7月21日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塚2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

生徒会費
値上げ案が可決

生徒会費が月額800円から1,300円へと値上げされ、今年の生徒会予算の総額は、17,570,639円となった。

総額千七百六十万円に

昨年度三月九日の臨時生徒総会で、生徒会費値上げ案が承認されたことにともない、生徒会費は四月から月額千三百円となった。

値上げ案の審議では「値上げ後の予算の配分のしかた」や「余裕が出る場合のプールのしかた」などについて、執行部と生徒との間にきびしい言葉のやりとりもあった。値上げに対する生徒の高い関心がうかがわれた。

執行部の回答に十分納得できない表情の人もいたが、承認されなければ平成四年度の能高祭や各種大会への選手派遣など、生徒会活動が事実上停止してしまうという説明から、改正案は原案どおり全校生徒の拍手で可決された。

これに伴い、体育後援会、および教育振興会からの補助金の打ち切りと繰り越し金の目減りによる収入減は、解消されることになった。また値上げにより、合計四十万九千円が、当初立てられていた予算案に増額する形で、各部に振り分けられ、部活動の活発化のために使われることになった。

更に百七十万円は、今年度から設置された「運転資金」として、各年度当初からの生徒会活動を円滑に進めるための資金として積み立てられた。

生徒会費値上げにより、今年度の生徒会予算の総額は、千七百五十七万六百三十九円となった。

活字を変えました

今号の「校友時報」は一行十三字詰め、13Q扁平という明朝体の文字で組んでみました。文字の大きさや形について、感想を聞かせてください。

週五日制を導入
九月から　本校は研究協力校に

週休五日制に向かう一般社会の動きに呼応して、新しい学校教育、家庭教育、地域の役割を考えていこうという、学校週五日制が、本校でもこの九月から導入されることになった。

この制度は全国の幼稚園、小・中学校、高校で一斉に実施に踏み切られるものであるが、本校では特に文部省の調査研究協力校として、二年間さまざまの面から研究を行うことになった。

本校に与えられた課題は、「進学校として、月二回の土曜日休業を実施し、学力水準の維持・向上を図るにはどうしたらよいか」というもの。具体的には、学力の向上や大学進学者数の拡大を目指し、授業時数を確保した上で、望ましい日課表をどのようにするか、教科科目の設定、教育内容、指導法（学習法）をどう工夫し改善するか、生徒自身が意欲を持って学ぶようにするためにはどうしたらよいか、保護者や地域の理解や協力をどのように求めたらよいかなどに関して調査・研究を行うことになる。

学校では、学年PTAや地区PTAで父母に説明したりアンケートをとったりしたのち、九月からの日課表その他の検討をしているが、まだ決定はしていない。

一つの案としては、土曜日で欠けた分の授業を他の日の六コマ目にふりかけた形の時間割にするなどの考えが出されて先生方が検討を急いでいるということだ。

ゆとりある教育は生徒本人も父母も先生方も大歓迎であるが、現実問題として、勉強の遅れや校外での事故を心配する声もある。少なくとも、「休みが増えてラッキー」などというものではないことははっきりしている。

鈴木先輩バルセロナへ

本校の新制三十一期生、鈴木裕美子選手はバルセロナ五輪自転車競技の代表に決定した。能代山本の五輪選手は鈴木選手で十六年ぶり六人目で女子では初めて。我が能代高出身では五人目となった。

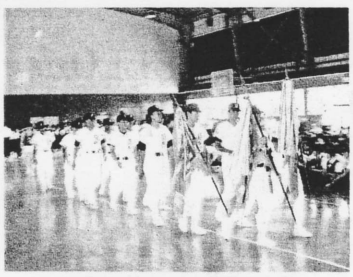
鈴木選手は本校の鈴木豊治先生の二女として峰浜村岩子に生まれた。能代高時代にはスキーでインターハイ出場、日大では自転車部監督の勧めでスキーから自転車に転身。先のソウルはスピードスケートの橋本聖子選手に敗れ、今回三度目の挑戦でついにバルセロナへの切符を手にしたというわけだ。

今月の六日、能代高の壮行会に臨んだ鈴木選手は「自分の才能を生かせる人生を送ってください。バルセロナでは頑張ります」とあいさつ。

生徒会では、激励の立て看板を作り、色紙や花束のほか全校生徒からお餞別をカンパして贈って、壮途を祝った。

鈴木選手は、例のボーイッシュな髪型、にこやかな表情で、贈られた花束を手に生徒の握手攻めに合いながら校門をあとにした。

壮行会
出場選手を激励
インタハイは宮崎で



激励の拍手を受けて選手退場

七月十七日に体育館で壮行会が催された。この会では、甲子園予選大会、明石予選大会にそれぞれ出場する硬式野球部、軟式野球部、インタハイに出場する体操部、空手道部、柔道部、（陸上競技部は大会出場中のため欠席）の選手が、全校生徒の激励を受けた。

それぞれの部のユニフォームを着た選手の入場ののち、生徒会長、校長先生の激ましの言葉があったが、本校を代表して晴れの舞台へ向かう選手を讃え、全力を尽くすようにという期待のこもったあいさつだった。

各部選手の代表による決意表明では、大会にかける意気込みが力強く述べられて全校生の拍手と声援が送られた。

今年のインタハイは八月一日から、遠く九州の宮崎県内の各会場で開催される。又水泳の東北大会は七月二十五日から郡山市で開催される。

「成るか」14年ぶり甲子園出場
軟式も明石が至近に

第七十四回全国高校野球選手権秋田県大会は、十八日から開催される予定だったが、雨のため一日順延し、十九日からいよいよ始まった。

また軟式野球部も、既に、奥羽大会の向こうに、八月二十六日から明石球場で開かれる全国大会での活躍を期待する声がしきりである。

今年、例年以上に充実した戦力を持つ能高硬式野球部は大きな期待を担って今大会に出場。今日まず八橋球場で大曲工業相手に第二回戦を戦うことになっている。

今年は、春の全県大会で優勝、また、東北大会では強豪の宮城・仙台育英高に敗れはしたものの、堂々の準優勝を飾った。その勢いを持続させることができれば、十四年ぶりの甲子園出場が果たせる。

戦力的にも「今年は」と思わせる要素がたくさんある。

まず、第一に安定した投手力があるというのが強みである。二人以上のエース級投手がいるということは、極めて有利であるとされるが、投手の多い今のチームではその条件がピッタリあてはまる。また、長打で攻める攻撃陣もスキのない打線をつくっている。

投・打・守のバランスのとれた安定したチームである。

また、この大会に限っていえることでは、運の良さもあげられる。本校は第一シードだが、対戦相手を見ると、よほどのアクシデントがない限りは、ベスト4入りは確実である。ツキも実力のうちとはよく言ったものである。しかし、各校とも、全力で試合に臨んでいるわけだから、一試合一試合を気を抜かずに戦ってほしい。

軟式野球部も今年は期待が大きい。

先日の県大会で奥羽大会への切符を勝ちとった軟式野球部は、硬式野球部と同様に投手力が安定しているのが強みである。一方、打線の方はどちらかといえば始打でつなげていくタイプだといわれている。しかし、その打線を力バーする守備力は十分ある。

硬式野球部と同様に、一人一人が出せる最大の力をこの大会にぶつけてほしい。

七月三十一日から始まる奥羽大会を前に、キャプテンの畠山靖男君（三A）は「身上である守りを徹底し、少ないチャンスをものにして、六年ぶりの全国大会出場を目指して頑張りたい」と語っている。

硬式野球部も軟式野球部も一つでも上の大会を望むのはもちろんだが、一つ一つの試合を大事にして悔いの残らない大会にしてきてほしい。

川村先生に助成金
斎藤憲三顕彰会

財団法人斎藤憲三顕彰会は平成四年度の研究助成を受ける個人を発表したが、本校の理科、川村幸生先生はこれに選ばれ、助成金を受けることになった。

先生の研究は、海岸砂にX線をあて、ヒーターで加熱することによって出てくる光を観察し、その光の色から砂の性質、例えば砂の変成や起源などを調べようというものである。

先生は、まず初めに実験装置を作ることに重点を置き、それを完成させた上で、実際に県内の海岸砂の実験を行っているということである。

「実験装置を作るのに、パソコンと機材をつなぐ必要があり、その点に苦労した。また調べる砂を一粒一粒分類するという作業も大変だった」と話しておられた。

また、先生のお話では、この研究の成果は砂の年代測定などはもちろん、更には考古学などいろいろな分野の研究にも応用することが出来るものだそうだ。

献血に28人協力

今年度第一回目の献血は、六月十一日に実施され、生徒二十六人、先生二人がこれに協力した。次回の予定は十月。

「参加」すること

▼第三十三回能高祭も大成功のうちに幕を閉じた。学校は今再び冷静さを取り戻し、三年生はいよいよ本格的に受験勉強を始めている。▼能高祭の準備から終了までには、普段机を並べて勉強しているだけでは分からないクラスメートの意外な一面や本来の姿が見えてくるものだ。▼そのような一人一人の持ち味が、学校生活の折々にもっと見えてくるような毎日を送れないものだろうか。授業中も普段の雑談の中でも「あの人らしいなあ」と納得したり、「その事ならあの人」と見当をつけたりがいくらでもできるというクラスなら、どんなに楽しいだろう。そうすれば、行事の際の助け合いも、もっと出来るようになるだろう。▼今年の能高祭は本当に生徒全員が参加したものだったのだろうか。能高生であるということは「能高の活動」に自分から進んで「参加」する人のことであり、大人とは「社会」に「参加」する人なのである。その「参加」とは、自分のすべきこと、出来ることを、積極的に責任をもって果たすということである。▼オリンピック精神としてよく言われる「参加することに意義がある」は "Not to win, but to take part" の訳文だという。「いかに自分の責任を果たしたか」が、その真意だとすれば、ただ存在するだけではなくて、自分の責任を果たす、いわば自分の part を take することが求められるのだと言える。